

靈的時代の到来

「シルバーバーチの靈訓」

(201)

▼「人間は現在の人種と異なる人種に生まれ変わることがあるというのは本当でしょうか。もしも本当だとすると、愛する者とも別れ別れになることになり、大変な悲劇に思えるのですが……」

「そういう考え方は、再生というものの真相を正しく理解していないところから生じるのです。決して悲劇的なことは生じません。そもそも地上的な姻戚^{いんせき}関係というのは、必ずしも死後にも続くとはかぎらないのです。イエスが地上にいた時、まわりの者が「お母さんがお見えになってますよ」と言ったのに対して、「いったい本当の母とは誰なのでしょう？ 本当の父とは誰なのでしょう？」と問うたのをご存知でしょう。

自我のすべてが一度に物質界へ生まれ出てくることは絶対にありません。地上で「自分」として意識しているのは、本来の自我のほんの一かけらにすぎません。全部ではないのです。その小さなかけらの幾つかが別々の時代に別々の民族に生まれ出るということは有り得ることです。すると、それぞれに地上的血縁関係をこしらえることになり、中には幽体の次元での縁戚すらできることもあります。それでも、靈的な親和関係は必ずしも存在しないことがあるのです。

永続性があるのは、唯一「愛の絆」だけです。血のつながりではありません。愛があり、血のつながりもある場合は、そこには

魂が求め合う絆がありますので、両者の関係は死後も続きます。が、血のつながりはあっても愛の絆がない場合は、すでに地上にある時から靈的には断絶しており、こちらへ来ても断絶のままとなります」

▼「死んで靈界入りする日（寿命）は何によって決まるのでしょうか。定められた日よりも長生きできないとしたら、心霊治療でも治らないことがあるのも、その辺に理由があるのでしょうか」

「おっしゃる通り、それも理由の一つです。靈がいつ物質に宿り、いつ物質から離れるかは、自然の摂理によって決まることです。とくに死期は故意に早めることが可能ですが、それは自然の摂理に反します。

人間は、脳の意識ではわからなくても、いつ生まれいつ死ぬかは、靈の意識ではわかっております。肉体から離れるべき時——これは生命の法則の一環として避けることはできません——が訪れたら、いかなる治療も効果はありません。一般論としての話ですが、忘れないでいただきたいのは、心霊治療というのはきわめて複雑な問題でして、根本的には身体の病気を癒すのが目的ではなく、魂の成長を促すためのものだということです。魂の体験としては病気も健康も必要です。物議をかもしかねない問題ですね、これは」

▼「スピリチュアリストの中にも相変わらずイエスは神の代理人

で救世主であると信じている人がいます。これはスピリチュアリズムの七大綱領(※)と矛盾しませんか」

※ 英国の女性霊媒エマ・ハーディング・ブリテンの霊言で述べられたもので、(一) 神は全人類の父である。(二) 人類はみな同胞である。(三) 霊界と地上との間に霊交がある。(四) 人間の霊は死後も存続する。(五) 人間は自分の行為に自分が責任を取らねばならない。(六) 地上での行為には、死後、善悪それぞれに報賞と罰が与えられる。(七) いかなる霊も永遠に進化する。以上の七つのうちの(二)と(五)に矛盾すると言っているのであろう。

「わたしは、何ごとにも寛容的で自主性を重んじるべきであるとの考えから、いかなる信条であれ、そう信じるのだという人にはその道を歩ませ、そうでないという人には、その人の信じる道へ行かせてあげればよいと考えています。信条はどうでもいいのです。教義は大切なものではありません。大切なのは「真実」です。が、地上であれ、霊界であれ、無限の真理のすべてを知り尽くすことはできません。ほんの一部しか見えないのです。そして、知れば知るほど、まだまだ知らねばならないことが沢山あることを自覚します。そこで、ますます寛容的になっていくのです」

▼「守護霊についてお話し願えませんか」

「霊が地上へ誕生してくるに際しては、一人の守護天使(※)がつけられます。それは地上という「家系」を同じくする者である場合もあれば、「霊的親和性」(霊系)によって選ばれる場合も

あります。いずれにしても、両者を結びつける何らかの共通の利益というものに基づいております。

しかし、両者の関係がどこまで親密となるかは、地上の人間の霊的成長しだいで決まることです。守護霊の働きかけをまったく感受できない場合は、霊力を使用して外部環境から操作せざるを得ません。意識的協力が不可能な場合は、無意識のうちにも協力関係をもたねばなりません。霊界からの働きかけは霊的にしきれませんから、いづどこであろうと、条件が揃った時にその影響力が届けられるように配慮するわけです」

※ Guardian Angel 日本では守護霊と呼び、その守護霊の守護霊、そのまた守護霊とたどっていくと、そうした「類魂」の大本もとに行き着く。これを守護神と呼ぶことがある。

いづれにせよ、英語でも日本語でも「守護」という用語が使われているために、何でもかでも「守ってくれる」と誤解されがちであるが、地上にいる当人の成長と進化が絶対的な目標であるから、そのために最も効果的な手段を取ろうとする。それが当人にとっては辛く苦しい体験に思えることもある。

もう一つの誤解は、じつと付き添って見つけてくれていくかに想像することである。実際は高級霊ほど仕事が多くて一刻の休みもなく活動している。その中で守護霊としての仕事を引き受けるのであるから、それはの形になり、直接的な仕事は指導霊にまかせることが多い。それでいて当人の心の動きの一つ一つに通じている。

シルバーバーチは霊言現象のための指導霊であり支配霊であって、バーバネルの守護霊ではない。守護霊は別にいたはずで、「わたしよりはるかに霊格の高い方たちの指示により……」といったセリフが見えるので、たぶんその中の一人であろうと私は見ているが、60年間、一度も表に出なかった。ここにも、シルバーバーチ霊団の次元の高さがうかがえる。

▼「天体が人間の宿命や日常生活に影響を及ぼすという占星術の考えを肯定なさいますか、否定なさいますか。もともと占星術は運命判断を目的としたものではないという認識の上での話ですが…」

「わたしは、地球上の天体も、地球上の人間の生命に影響を及ぼしている事実は認めますが、それは、あくまでも物的影響力をもつ放射物に限られています。

その放射物が何であれ、それが靈力をしのぐほど強烈であったり強大であったりすることは有り得ないと信じます。あくまでも靈は物質より上である——靈が王様で物質は従僕である、というのがわたしの考えです。

宿命とおっしゃいましたが、何もかもあらかじめ定められているという意味での宿命はないと考えています。これも用語の問題——宿命という用語をどう定義するかの問題です。宇宙はあくまでも秩序によって支配されていて、人間生活の重大な出来事もその計画の一部であるという意味では、あらかじめ定められていると言えると思います。

そうした宿命的な出来事を生み出す波動や放射物、そしてそれらが人間各自に及ぼす影響を正確に計算しようと思えばできないことはないはずですが、最終的にはやはり靈が絶対優位にあり、物的なものは靈的なものに従属したものであると主張いたします」

▼「よく問題となる靈と物質との結合の時期を一応受胎の瞬間であるとした場合、その受胎までは靈ないし意識体はどこで何をし

ていたのでしょうか。そもそも意識体というのは何なのでしょ

か」
「生まれ変わり（再生）のケースは別として、靈は、物質と結合する以前から存在しているも、その時はまだ個性はそなえていないということです。物質と結合してはじめて人間の個性が生ずるのです。そして、そのパーソナリティの発達とともに内部の個的大我が顕現されてまいります。

したがって、ご質問に対する答えは、靈は無始無終に存在していますが、物的身体と結合してはじめて個別性というものを持つことになるということです。ただし、最初に断りましたように、例外として、物的身体との結合が初めてでないケースがあります」

▼「靈能開発に際して、真面目な靈を引き寄せ、邪靈を追い払うにはどうしたらよいでしょうか」

「類は類を呼ぶといえます。あなたの動機が真面目なものであれば、つまり常に最高のものを求め、邪心をもたず、利己的な心がなければ、親和力の作用そのものが同じような靈を引き寄せます。また、そこには危険性もないこととなります。

要するにあなたから出ている雰囲気、異質なものを近づけなくするわけです。もしも聖人君子に愚かしい靈がつくとしたら、宇宙には摂理がないこととなります」

▼「霊的な援助は必ず背後霊を通して届けられるのでしょうか——大霊が直接関与するのではなくて」

「大霊による直接の関与などというものは絶対にありません。あなた方が想像なさるような意味での人間的存在ではないのです。

そうではなくて、ヤコブのはしご³（旧約聖書）の話に象徴されているように、最低のものから最高のものへと至る霊的階梯があつて、そこに無数の中間的存在がいるのです。上へあがるほど、より神性を帯びた意志と叡智を表現しております。

ですから、人間が心を開き、靈性を開発し、向上するにつれて、より大きな靈力、より大きな知識、より大きな理解力をそなえた高級な存在と連絡が取れるようになるわけです。みな大霊の僕として、この全大宇宙の人間的存在の向上を援助する仕事に、自発的にたずさわっているのです。こちらの世界では、向上進化が進むほど、自分が得たものを他に施すべきであるとの自覚が強くなるのです。

以上がご質問に対するわたしの答えです」

▼シルバークーチの思想的特徴の一つは「摂理」の存在を強調することである。人間がこしらえた法律は事情の変化に応じて書き改める必要が生じる。が、霊的摂理にはそれは絶対に有り得ないという。そのことを次のように説く——

宇宙の大霊は無限の存在です。そして、あなた方もその大霊の一分子です。不動の信念をもって人間としての正しい生活を送れ

ば、きっとその恩恵に浴することが出来ます。このことに例外はありません。いかなる身分の人であろうと、魂が何かを求め、その人の信念に間違いがなければ、必ずやそれを手にすることが出来ます。

それが宇宙の摂理なのです。その摂理に調和しさえすれば、必ずや良い結果が得られます。もしも良い結果が得られないとすれば、それは摂理と調和していないことを証明しているにすぎません。地上の歴史をひもといてごらんになれば、いかに身分の低い者でも、いかに貧しい人でも、その摂理に忠実に生きて決して裏切られなかった人々が数多くいることがわかります。忠実に生きて決して摂理に文句を言う人を引き合ひに出してはいけません。

時としてしい環境に閉じ込められ、それが容易に克服できないことがあります。しかし、正しい信念さえ失わなければ、そのうちきつと全障害を乗り越えることができます。そんな時は大霊の象徴であるところの太陽に向かつて、こう述べるのです——自分は**大霊の一部なのだ、不滅なのだ。永遠の存在であり、無限の可能性を宿しているのだ。そんな自分が、限りある物質界のことで挫けるものか、と。そう言えるようになれば、決して挫けることはありません。**

多くの人間はまず不安を抱きます。本当にそうなのだろうかといふか訝ります。その不安の念がバイブレーションを乱すのです。完き愛は怖れを払う（ヨハネ伝）　まず神の御国と義を求めよ。さすれば全て汝のものとなる（ルカ伝）——遠い昔、大霊の摂理を完ぺきに理解したナザレのイエスによって説かれた教えです。彼は、勇気をもって実践すれば必ず成就されることを身をもって示しました。あなた方も、その摂理が働くような心構えができれば

ば、何事も望みどおりの結果が得られます。

もう一つ、別の摂理をお教えしましょう。代価を払わずして価値あるものを手に入れることはできないということです。よい霊媒現象を得たいと思えば、それなりの感受性を磨かなくてはなりません。また、この世的な富を蓄積していると、それなりの代価を支払われます。つまり地上的なものに心を奪われて、その分だけ霊としての義務を怠れば、地上的な富が増えても、こちらの世界へ来てみると、自分がいかにみずばらしいかを思い知らされます。

人間の魂には宇宙最大の富が宿されているのです。あなた方ひとりが大霊の一部を構成しているのです。地上のいかなる富も財産も、その霊の宝にまさるものはありません。わたしたちは皆さんの中に存在するその金鉱を掘り起こすことをお教えしているのです。人間的煩惱の土くれの中に埋もれた霊のダイヤモンドをお見せしようとしているのです。

できるだけ高い界層のバイブレーションに感応するようになっていただきたい。自分が決して宇宙で一人ぼっちでないこと、いつも身のまわりに自分を愛する霊がいて、ある時は守護し、ある時は導き、ある時は補佐し、ある時は靈感を吹き込んでくれることを自覚していただきたい。そして、霊性を開発するにつれて宇宙最大の霊すなわち神に近づき、その心と一体となっていくことを知っていただきたい——そう願っているのです。

人間は、同胞のために自分を役立てることによって大霊に仕えることとなります。その関係を維持しているかぎり、その人は大霊のふところに抱かれ、その愛に包まれ、完全な心の平和を得ることになります。

単なる信仰、盲目的信仰は、烈しい嵐に遭えばひとたまりもなく崩れ去ることがあります。しかし、立証された知識を土台として築かれた信仰は、いかなる嵐にもビクともしません。

いまだ証あかしを見ずして死後の生命を信じることのできる人は幸せです。が、証を手にして、それをもとに、宇宙の摂理が愛と叡智によって支配されていることを得心するが故に、証が提供されていないことまでも信じることのできる人は、その三倍も幸せです。

ここにお集まりの皆さんは、完ぺきな信仰を持っていなければなりません。なぜなら、皆さんは死後に関する具体的な知識をお持ちだからです。霊力の証を手しておられるからです。そして、この段階までこられた皆さんは、さらに、万事は良きに計らわれていること、大霊の摂理に調和しさえすれば必ず幸せな結果がもたらされるとの信念を持たれてしかるべきです。無明むみょうから生まれるもの、あなた方のいう「悪」の要素によって迷わされることは絶対のないとの信念に生きなくてはなりません。自分は大霊の摂理による保護のもとに生き、そして活動しているのだという信念です。

心に邪よしまなものさえなければ、善なるものしか近づけません。善性の支配するところには善なるものしか存在し得ないからです。こちらの世界から近づくのも大霊の使徒のみです。あなた方は何一つ恐れるものはありません。あなた方を包み、あなた方を支え、あなた方に靈感を吹き込まんとする力は、宇宙の大霊からくる力にほかならないのです。

その力は、いかなる試練においても、いかなる苦難においても、あなた方の支えとなります。心の嵐を鎮め、絶望の暗闇から知識の光明へと導いてくれます。あなた方は進歩の大道にしっかりと

足を置いておられます。何一つ恐れるものはありません。

完まき信念は恐れを払います。知識は恐れを駆逐します。恐れは無知から生まれるものだからです。進化せる魂は、いついかなる時も恐れることを知りません。なぜならば、自分に大霊が宿るからには、人生のいかなる出来事も克服できないものは有り得ないことを悟っているからです。

恐怖心は、みずからの魂の牢獄をこしらえます。皆さんはその恐怖心を達観し、そのバイブレーションによって心を乱されることなく、完べきな信仰と確信と信頼を抱き、独立独歩の気構えで、こう宣言できるようでなければなりません——自分は大霊なのだ。足もとの小さな事情などには断じて迷わされない。いかなる困難も、内部の無限の霊力できつと克服してみせる、と。

その通り、人間はあらゆる環境を支配する力を所有しているのです。それを、何を好んで縮こませるのでしょうか。

大霊は、物的なものも霊的なものも支配しております。大霊の目からすれば、両者に区別はありません。ですから、物の生命を霊の生命から切り離して考えるではありません。決して水と油のように分離したものではありません。両者とも一大生命体を構成する不可分の要素であり、物的なものは霊的なものに働きかけ、霊的なものは物的なものに働きかけております。

ですから、皆さんのように霊力の恵みを受けておられる方にとつては、いつ、いかなる場にあつても、大霊の存在を意識した生き方をしていくかぎり、克服できない困難は絶対にふりかからないうという信念に燃えなくてはなりません。

この世のいかなる障害も、大霊の目から見て取り除かれるべきものであれば、きつと取り除かれます。万が一、あなた方の苦難

があまりに大きくて耐え切れそうになく思えた時は、こう理解してください——わたしたちの方でも向上進化の足を止めて皆さんのために精一杯の努力はいたしますが、時にはじつとその苦難に耐え、それがもたらす教訓を学び取るように心掛ける方が賢明である場合もある、ということですよ。

地上の人間のすべてが、自分が人間的煩惱と同時に神的属性もそなえていることを自覚するようになれば、地上生活がどれだけ生きやすくなることでしょう。トラブルはすぐに解決され、障害はすぐに取り除かれることでしょう。しかし人間は、心の奥に潜在する霊力をあまり信じようとしません。人間的煩惱はあくまでも地上だけのものです。神的属性は宇宙の大霊のものです。

その昔、この世を旅する者であれ、この世の者となるなかれ、”と言う訓え(※)が説かれました。が、死後の生命への信仰心に欠ける地上の人間には、それを実践する勇氣がありません。金持ちを羨うらやましがり、金持ちの生活には悩みがないかのように考えます。金持ちには金持ちとしての悩みがあることを知らないからです。神の摂理は財産の多い少ないでごまかされるものではありません。

※ 身は俗世にあつても俗人となつてはいけないというイエスの訓えで、たしかにバイブルにはそういう意味のことを説いている箇所があることはあるが、そっくりそのままの言葉は見当らない。モーゼスの『靈訓』の中でも引用されているところを見ると、地上の記録に残っていないだけで、靈界の記録には記されているのであろう。オーエンの『ペールの彼方の生活』の通信靈の一人が、「われわれがキリストの地上での行状を語る時は、靈界の記録簿を参照している」と述べている。ちなみに原文を紹介しておく——Be in

the world but not of the world. イエスは英語でしゃべったわけではないが、
in と of の本来の意味をうまく利かせた名言といえるであろう。

人間が地上にあるのは、人格を形成するためです。ふりかかる問題をどう処理していくかが、その人の性格を決定づけます。しかし、いかなる問題も地上的なものであり、物的なものです。一方、あなたという存在は大霊の一部であり、神性を宿しているわけですから、あなたにとって克服できないほど大きな問題は絶対に生じません。

心の平和は一つしかありません。大霊と一体となった者にのみ訪れる平和、大霊の御心と一つになり、その大いなる意志と一つになった人に訪れる平和、魂も精神も心も大霊と一体となった者にのみ訪れる平和です。そうなった時の安らぎこそ、真の平和といえます。宇宙の摂理と調和するからです。それ以外には平和はありません。

私にできることは摂理をお教えるだけです。その昔、神の御国は自分の心の中にあると説いた人がいました。外にあるのではないのです。有為転変^{ういてんぺん}の物質の世界に神の国があるはずがありません。魂の中に存在するのです。

宇宙の摂理は精細をきわめ、しかも完璧ですから、一切のごまかしが利きません。悪の報いを免れることは絶対にできませんし、善が報われずに終わることも絶対にありません。ただ、永遠の摂理を物質という束の間の存在の目で判断してはいけません。より大きなものを見ずに小さいものを判断してはいけません。

地上での束の間のよろこびを、永遠の霊的なよろこびと混同してはなりません。地上のよろこびは安ピカであり、気まぐれです。

あなた方は地上の感覚で物事を考え、わたしたちは霊の目で見ます。摂理を曲げてまで、人間のよろこびそなうなことを説くことは、わたしにはできません。

霊の世界から戻ってくる者にお聞きになれば、みな口を揃えて摂理の完ぺきさを口にするはずですが、そこまで分かった霊になると二度と物質の世界へ誕生したいとは思いません。ところが人間は、その面白くない物質の世界に安らぎを求めようとします。そこでわたしは、永遠の安らぎは魂の中にあることをお教えしようとしているのです。最大の財産は霊の財産だからです。

どこまで向上しても、なお自分に満足できない人がいます。そういうタイプの人は、霊の世界へ来ても満足しません。不完全な自分に不満を覚えるのです。大霊の道具として十分でないことを自覚するのです。艱難^{かんなん}辛苦を通して、まだまだ魂に磨きをかけ、神性を発揮しなければならぬことを認識するのです。

何とかせねばならないことがあることを知りながら、心の安らぎを得ることができるといえるでしょうか。地上の同胞が、知るべき真理も知らされずに、神の御名のもとに間違った教えを聞かされている事実を前にして、わたしたちが安閑^{あんかん}としていられると思われませんか。

光があるべきところに闇があり、自由であるべき魂が煩惱に負けて牢に閉じ込められ、人間の過ちによって惹き起こされた混乱を目のあたりにして、わたしたち先輩が平気な顔をしていられると思われませんか。

わたしたちがじっとしていられなくなるのは、哀れみの情に耐え切れなくなるからです。霊的存在として当然受けるべき恩恵を受けられずにいる人間がひしめいている地上に、何とかして大霊

の愛を行きわたらせたいと願うからです。大霊は、人間に必要な可欠のものはすべて用意してくださっています。それが平等に行きわたっていないだけのことです。偉大な魂は、他の者が真理に飢え苦しんでいる時に、自分だけが豊富な知識をもって平気な顔をしていられないはずですよ。

わたしたちにとって、地上の人間を指導していていちばん辛いのは、時として皆さんが苦しんでいるのを心を鬼にして傍観しなければならぬことがあることです。本人みずから闘い抜くべき試験であるということがわかつているだけに、はたから手出しをしてはならないことがあるのです。首尾よく本人が勝利をおさめれば、それはわたしたちの勝利でもあるのです。挫折すれば、それはわたしたちの敗北でもあるのです。いついかなる時も、わたしたちにとっての闘いでもあるということです。それでいて、指一本、手出しをしてはならないことがあるのです。

このわたしも、人間が苦しむのを見て涙を流したことが何度かあります。でも、ここは絶対に手出しをしてはならない、と自分に言い聞かせました。それが摂理だからです。その時の辛さは、苦しんでいる本人よりも辛いものです。しかし、本人みずからの力で解決すべき問題を、このわたしが代わって解決してあげることは許されないので。もしもわたしが指示を与えたら、それは当人の自由選択の権利を犯すことになるのです。もしもこの霊媒（バーバネル）個人にかかわることで、わたしが、為すべきことと為すべきでないことをいちいち指示しはじめたら、一人間としての自由意志を奪うことになるのです。その時から（霊媒としては別として）人間としての進歩が阻害されはじめます。

霊性の発達は、各自が抱える問題をどう処理していくかに掛か

っています。物事がラクに、そして順調にはかどるから発達するのではありません。困難が伴うからこそ発達するのです。

が、そうした中であって、わたしたちにも干渉を許される場合が生じます。万が一わたしたちスピリットとしての大義名分が損なわれかねない事態に立ち至った時は、大いに干渉します。たとえば、この霊媒を通じての仕事が阻害される可能性が生じた場合は、その障害を排除すべく干渉します。しかし、それが霊媒個人の霊的進化にかかわる問題であれば、それを解決するのは当人の義務ですから、自分で処理しなければなりません」

「タネ時きと刈り取りの摂理は、大自然の摂理の中でも、もっともつと多くの人に理解していただきたいと思っています。大地が実りを産み出していくという自然の営みの中に、大霊の摂理がいかに不変絶対のものであるかを読み取るべきです。大地に親しみ、大自然の摂理の働きを身近に見ておられる方なら、その仕組みの素晴らしさに感心し、秩序整然たる因果関係の営みの中に、そのすべてを計画した大精神すなわち神の御心を、いくばくかでも悟られるはずですよ。

蒔いたタネが実りをもたらすのです。タネは正直です。トマトのタネを蒔いてレタスがでることはありません。蒔かれた原因は、大自然の摂理に正直にしたがって、それ相当の結果をもちます。自然界について言えることは、そのまま人間界にも当てはまります。

利己主義のタネを蒔いた人は利己主義の報いを刈り取らねばなりません。罪を犯した人はその罪の報いを刈り取らねばなりません。

ん。寛容性のない人、かたくなな人、利己的な人は、悲寛容性と頑固と利己主義の結果を刈り取らねばなりません。この摂理だけは変えられません。永遠に不変です。いかなる宗教的儀式、いかなる讃歌、いかなる祈り、いかなる聖典をもってしても、その因果律に干渉して都合のよいように変えることはできません。

発生した原因は、数学的・機械的正確さをもって結果を生み出します。聖職者であろうと、平凡人であろうと、その大自然の摂理に干渉することはできません。靈的成長を望む者は、靈的成長を促すような生活をするほかはありません。

その靈的成長は、思いやりの心、寛容の精神、同情心、愛、無私の行為、そして仕事を立派に上げることを通して得られます。言いかえれば、内部の神性が日常生活において発現されてはじめて成長するのです。邪よしまな心、憎しみ、復しゅう心、悪意、利己心といったものを抱いているようでは、自分自身がその犠牲となり、歪ゆがんだ、ひねくれた性格という形となって代償を支払わされます。

「人生の究極の目的は、地上も死後も、靈性を開発することにあります。物質界に誕生してくるのもそのためです。その目的に適った地上生活を送れば、靈はしかるべき発達を遂げ、次の生活の場に正しく適応できる靈性を身につけた時点で死を迎えます。そのように計画されているのです。こちらへお出になっても同じ過程が続き、そのつど靈性が開発され、そのつど古い身体から脱皮して靈妙さを増し、内部に宿る靈の潜在的な完全性に近づいてまいります」

「今わたしが申し上げたことに、批判がましい気持はみじんも含まれておりません。われわれはみんな大靈であると同時に人間でもあります。非常に混み入った存在——見すると単純のようで、奥の深い存在です。魂というものは開発されるほど単純さを増しますが、同時に奥行きを増します。単純さと深遠さは、同じ一本の棒の両端です。作用と反作用は、科学的にいつても正反対であると同時に同一物です。

進歩は容易には得られません。もともと容易に得られるようになっていないのです。われわれはお互いに生命の道の巡礼者であり、手にした靈的知識という杖が、困難に際して支えになってくれます。その杖にすぎることです。靈的知識という杖です。それを失っては進化の旅は続けられません」